

光といのち

第135号

—春彼岸—

2022年3月10日発行

発行所

真宗大谷派勝善寺

〒299-2214

千葉県南房総市二部1344-2

電話 0470-57-2657

FAX 0470-57-2290

メール info@syozenji.or.jp

URL http://syozenji.or.jp/

住職 釋孝昌（井上孝昌）

親鸞聖人

世のなか安穩なれ、
仏法ひろまれと、
おぼしめすべし。

『御消息集』

日本国憲法

「日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであって、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めている国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思う。われらは、全世界の国民が、ひ

としく恐怖と欠乏を免れ、平和の内に生存する権利を有することを確認する。」（前文）から抜粋

ロシア大統領プーチンの行為により、ウクライナ国民は「安全と生存」が奪われ「専制と隷従、圧迫と偏狭」に覆われた。

今、この事態がおさまる見通しは、まったく無い。これにより、世界がそして日本が、どう変化していくか、不安であり恐ろしくもある。



境内のサクラの木についた苔を消毒している川名喜昭さん。
—1月18日(火)—

月曜朝のお勤めで、このことが話題になりました。

プーチンの暴挙に強く憤り、それを止められない虚しさを感じていますので、「帝政ロシアを倒したように、ロシア国民がプーチン政権を倒すしかない」とか「プーチンが殺されれば、という思いが起きます」などと言いました。そうすると何人かの方がすかさず「そう思う。」と同調、さらに正義の旗を振り「目には目を歯には歯をだ。」と感情がエスカレートします。

恐ろしいことです。仏さまの前で私たちは、人殺しをしようと思気投合していたのです。

さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし。

『歎異抄』

親鸞聖人は、条件さえ整えば人間はどんなことでもすると。さらに「わがこころのよくて、ころさぬにはあらず。また害せじとおもうとも、百人千人をころすこともあるべし」とも仰いました。心の善悪が行為を決めるわけではない。

この考えは、善行を勧め悪行

を懲らしめる常識では、理解できませんね。しかし、それが人間存在の事実だと、親鸞聖人は教えます。

題字下の言葉は親鸞聖人が、念仏の是非をめぐる争いの矢面に立たされていた関東の門弟たちの代表に、京都から差し出した手紙の言葉です。

念仏には、戦争を止める力もコロナウイルスを退散させる力もありません。それでも「世のなか安穩なれ、仏法ひろまれ」と思う心が私に起こります。

いろいろ私に起こり来ることが、縁あれば何でもしてしまう私であると、目覚めさせます。

南無阿弥陀仏

春彼岸会

三月二十一日(月) 春分の日
10時〜11時半

「正信偈」などをお勤めした後に住職が法話します。

どうぞお参りください。また、YouTube限定公開で配信しますので、ご希望の方はメールで「お参りします」とお申し出ください。

主人の遺言

いろいろつらいことがあるだろうが、どうか念仏にかへて

たのむでな……と

昭和二十二年十月二十二日 三十八才

小山貞子さんは、曾我量深師を通して親鸞聖人の教えに出遇い、師の教えを聞き続け体得された念仏の人です。

貞子さんが二十六歳の時に亡くなった夫の、五十回忌の記念品として編修された『まるもうけ——みんなの本』という冊子の冒頭に、右の「主人の遺言」があります。貞子さんの一生を決定した言葉なのでしょう。

貞子さんが師事した曾我量深師は、現在私たちを育てくださっている先生方やそのまた先生方が、師と仰ぐ真宗大谷派僧侶です。

下の「唯今に生きる」は、毎年報恩講法話をお願いし

ている百々海真先生の御尊父百々海^{さどし} 師が、その冊子に寄せたものです。

左頁の「小山貞子記『まるもうけ』」は、池田勇諦先生の講義録からの抜粋です。

小山貞子さんは、あとがきに「曾我先生はご法話の中で、大きな池に石を投げ込んだら、初めのうちは小さな輪でも大きな輪になって行き、しまいに池いっぱいになったことを、今この出版のご縁によってほんとうにそおなっているなあととなつかしく思われます。」と書いています。

今、私にまで、その輪が伝わってきました。

南無阿弥陀仏

唯今^{ただ}に生きている小山貞子さん

小山貞子さんと初めてお会いしたのは、平成四年一月五日、東京の法友、山上一宝さん宅での新年会の席上だ。

顔を会わせたとき、早速、

「小山さん、あなたは曾我量深先生から随分と長い間仏法を聞いて

ておられるのでしょうか、なにを聞かれましたか」とおたずねしたら、即刻、

「唯今を頂戴するということをおしえてもらいました」と、すばらしい答が返ってきた。こんな人に遇えたことがたまらなくうれしかったことを未だに覚えてい

る。

小山さんの言葉には、教学用語も、一切の説明もない。

人間のはからいをこえて動いてくる宗教的直観のままだが、身を通して表現されてくる。小山さんはよく「私の言葉を覚えていくれたことがうれしい」と言う。決して自惚れではない。小山さん自身が、「如来よりたまわたりたる言葉」と楽しんでる。だから、聞いてうなずいてくれると、如来の言葉だと証^{あかし}してくれたとうれしいのだろう。

初めてお会いしてから既に三年。電話で、葉書で、また直接小山さんにお会いするたびに、なるほど、この人は、私の考えのつくりだす観念の過去や未来にしばられず、「唯今を頂戴している人だ」と教えられる。

昨年十一月、たまたま、九州の長仁寺に電話をしたら、小山さんが法縁で来ておられるという。電話口に出てもらい、大病で

手術をされたあとなので、つい世間ごころで、「小山さん、長旅は大丈夫？身体にこたえない？……」

と言ったら、

「のせてくださっている世界が確かだからネ」と言う。臨機応変のときの明答だ。内心やられたな——と頭をかきかき、また、こにくらしいバァさんとも感じたことは事実である。

小山さんには、自分用の畠がある。小山さんにとって、畠は、一切をうけいれ消化し、野菜のそれぞれを光らせる浄土であり、また、いつも、大根やにんじんと話をしていっているという。故曾我量深先生の「宿業は本能なれば則ち諸仏と感應道交す」という教えを、体感しているのだろう。

曾我量深先生の教えを本当にねんごろに説いてくださる先生はありがたい。しかし、同時に、私のような愚痴坊主には曾我先生の教えを生活を通して実証してくださる方は、実に大切なご同朋である。

「寺宝とは、ホンモノの一人の念仏者」と、小山さんの善知識、福井県武生市浄秀寺の故松原現筌師に教えられる想いにうたれる昨今である。

東京港区了善寺住職百々海^{さどし} 怜

小山貞子記『まるもうけ』

『まるもうけ—みんなの本—』に掲載されている福井県武生の河野さんという人が書いた亡夫の五十回忌に当たり」という文章を読みます。「もう今から四十何年昔のことになります、小山さんと私は浄秀寺の門徒仲間であり、聞法の同志であるので毎月のように話し合います。ある時、曾我量深先生の講義が浄秀寺で開催された時でした。休憩時間に私から問い掛けましたことです。私曰く、「小山さん、子供さん二人あって、夫に先立たれて、なかなか大変ですね。しかし、これから生涯送るについて色々お考えでしょうが、再婚ということはお考えでないですか。その若さでは誰でも考えますが、私も心当たりがあるのでお尋ねします」と問い掛けた訳です。小山さん曰く、「有り難うございます。私は夫が先立ったことを受けて肝に銘じたのです。夫は単に先立ったのではなく、お前の幸せは教えに遇うということから始まるぞ」と大きな問題を宿題にして先立ったと私は受け取っていますので、私の人生はこれから本当の人生として出直していききたいと思うのです。二人の子供も一人前に育

てていききたいと思いますが私ほどの者が計画や段取、分別で幸福が確実に決まる訳ではありませんからね。自由自在に聞法したいと思います。無理な考え方はしないで、なるがまま、あるがままの生き方で分別は出さないことにして、これ以上のことは如来様におまかせと思います」と、はつきり言い切られました。私は再婚の話を持ちかけた己が恥ずかしく思ったことでした。

それから開法会ごとに話し合っています。彼女はこの点を一つにして自覚の道を一息一息熱心に開法に直進されていられます(『まるもうけ』八八〜八九頁)と。再婚をも打ち捨ててこの道に生きられた小山さんの心構え、態度がよくうかがわれる一文だと思えます。

それからもう一つ、この本から聞いていただきます。「共に」という問題があるでしょう。自分だけ喜んでいればいいのだというものではないという。それについて小山貞子さんのお孫さんが書いた「おばあちゃん。いつまでも長生きしてね」という文章を読みます。

「おばあちゃん(小山貞子)とお母さん(金丸悦子)の観点は、いつもその世間の常識とはズレ

た所にある。世間で悪いとされるもの、善いとされるものに決して惑わされることがない。二人の間に共通してある信念は、時に幼かった私を苦しめた。「なぜ? どうして? 悪いことは悪い、善いことは善い: それ以上何があるの?」と。しかし、今ようやく私にも解りかけてきた。善悪の判断を超えた所にある世界のことが:。それだけではとても間に合わない自分自身のことが:。だから今、このすばらしい感動の世界を与えてくれた、おばあちゃんとお母さんがいてくれて本当に良かったと思う。そしてこれから私は、私の子供たちにそんな世界があるんだよ。ということ言葉をなく態度で、おばあちゃんとお母さんがそうしてくれたように伝えられたらいいなあと思います。おばあちゃん、いつまでも長生きしてね(『まるもうけ』一三〇〜一三一頁)と。小山さんはご晩年に胃癌の手術を受けて養生をしておられた。その頃にお孫さんが今のこの文章を書いておられるのです。そして「自分の子供にも伝えていきたい」とあったでしょう。親から子、子から孫へ、更に:と伝えていく。そういう責任感というか、そういうも

のをあらわしてくださっていることを、私は本当に尊いなあと感じると同時に、学ばせられるわけでございます。

伝えられていくという形で、小山さんという人の聞法の確かさが証あかしされていくわけですね。聞いた教えが、小山さんの生き方、生活の場における感覚と発想として具体化しているわけです。そういうことが、こういう文章を読むと学ばせられるわけでございます。この小山さんの聞法の確かさを皆さん方に知っていただけたらと思うわけでございます。

小山貞子さんの実家が福井県武生市浄秀寺と縁があり、その住職松原現げん釜師が時々曾我量深師を寺に招き法座を開いていたので、その縁で貞子さんは師に出遇い、大阪に転居されてからも毎月浄秀寺で開かれる法座で聞法されていたそうです。

また貞子さんは、福井県の聞法仲間の家で、仏法を語り合う場を開き、多くの方が感化されたそうです。

(『教行信証』に学ぶ六より)

宗祖親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年

大谷暢裕御門首は二〇二〇年十一月二十日の門主継承式で「人生が念仏に始まり、人生を終える時、念仏の世界に帰る。この真宗の教え、「南無阿弥陀仏」を世界中の人々に届けることが、真宗に縁をいただいた私どもの大切な使命です。」と表白され、「世界中の人々に「南無阿弥陀仏」を届け、「四海の内みな兄弟とするなり」の同朋の輪の広がり、微力を尽くしてまいりたいと思います。」とご挨拶されました。

真宗大谷派講師池田勇諦先生は、このご門首の一連のお言葉を受けて「本当にこんなにちの問題、課題が何であるか、従って私たちはどこに立たなければならぬのか。そのことを一点、はっきりと指摘してください、とても大切なお示しであったと、聞かせていただきました。」

そうしたことをいただきますと、来る慶讃法要というのは、私どもがお勤めするということに先立って、ご法要から私たちが願われている、要請されているのではないですか。何が要請されているか。それは今申した「回帰」、南無阿弥陀仏のこのいのちに回帰する、根源的連帯に帰る。この一点です。」と「真宗本廟お待受け大会・本廟創立七百五十年大会」(二〇二一年四月五日)の記念法話でお話しくださいました。

慶讃法要は、二〇二三年三月〜四月に真宗本廟(京都東本願寺)でお勤めされます。

勝善寺では、真宗の教え、「南無阿弥陀仏」を伝えるために、次の呼びかけをしております。

- 一 毎日、御本尊を礼拝し、念仏申しましょう。
- 一 月に一度は、寺に足を運び聞法しましょう。
- 一 法名をいただき仏教徒の自覚を持ちましょう。

また、今後の聞法の間では、南無阿弥陀仏のこのいのちに回帰する。根源的連帯に回帰する」とは、どういうことなのかを学び考え語り合ってまいりましょう。

今、この法要への参拝旅行を計画中です。座席確保の都合がありますので、ご希望の方は四月中にお申し出ください。コロナウィルス感染症などにより、中止の場合もあります。

真宗の教え、「南無阿弥陀仏」を生きる

小山貞子さん



不思議を生きる私

聞法生活がどのような人を生み、念仏の世界がどう伝わっていくか、小山さんに教えられました。見開きページを読んでください。

写真は、おそらく七十二歳頃の胃がん手術前後でしょう。心配が不安や妄想を絶えず引き起こしたことでしょうが、帰る確かな世界を持つた人の「光顔巍巍」たるお姿と、拝察しました。